

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特 許 公 報(B2)

(11) 特許番号

特許第3669758号
(P3669758)

(45) 発行日 平成17年7月13日(2005.7.13)

(24) 登録日 平成17年4月22日(2005.4.22)

(51) Int.Cl.⁷

F I

B 6 5 D 43/16

B 6 5 D 43/16 1 0 3

B 6 5 D 43/22

B 6 5 D 43/22

請求項の数 5 (全 18 頁)

(21) 出願番号	特願平8-41713	(73) 特許権者	000115108
(22) 出願日	平成8年2月28日(1996.2.28)		ユニ・チャーム株式会社
(65) 公開番号	特開平9-58725		愛媛県四国中央市金生町下分182番地
(43) 公開日	平成9年3月4日(1997.3.4)	(73) 特許権者	000002897
審査請求日	平成14年9月11日(2002.9.11)		大日本印刷株式会社
(31) 優先権主張番号	特願平7-149092		東京都新宿区市谷加賀町一丁目1番1号
(32) 優先日	平成7年6月15日(1995.6.15)	(74) 代理人	100064285
(33) 優先権主張国	日本国(JP)		弁理士 佐藤 一雄
前置審査		(74) 代理人	100091982
			弁理士 永井 浩之
		(72) 発明者	石 川 浩 樹
			香川県観音寺市観音寺町甲413-1
		(72) 発明者	鍛 持 泰 彦
			香川県観音寺市杵田町甲1285
			最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 蓋装置

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項1】

容器本体に装着されるとともに、外枠と外枠の内側に形成された取出口を有する蓋本体と、

この蓋本体に揺動自在に取付けられ、前記取出口を密閉する開閉蓋とを備え、

前記蓋本体と前記開閉蓋との間の揺動部に、前記開閉蓋を開方向に向かって付勢する弾性付勢手段を設け、

開閉蓋の周縁に係止部が設けられ、蓋本体に前記係止部に係合する係合部が設けられ、前記蓋本体の係合部近傍であって外枠のうち係合部の外側に位置する部分に、上方から押圧された場合に下方へ弾性的に降下して開閉蓋の係止部と蓋本体の係合部との係合を解除する押圧部を設け、押圧部を上方から押圧することにより係止部と係合部との係合を解除して、弾性付勢手段により開閉蓋をワンタッチで開き、

弾性付勢手段は細長状ゴムからなり、この細長状ゴムの一端を蓋本体に他端を開閉蓋に各々取付け、開閉蓋の閉時に細長状ゴムを揺動軸から離れる方向へ湾曲させ、

蓋本体および開閉蓋のいずれか一方に、細長状ゴムを固着する固着部を設け、他方に細長状ゴムを差込み収納する収納部を設け、

蓋本体および開閉蓋のうち収納部が設けられた一方に、開閉蓋の閉時に湾曲する細長状ゴムの中間部を受入れる受入部を設けたことを特徴とする蓋装置。

【請求項2】

係止部は開閉蓋の自由端に設けられていることを特徴とする請求項1記載の蓋装置。

10

20

【請求項 3】

蓋本体と開閉蓋は各々合成樹脂製となっており、このうち蓋本体用樹脂は開閉蓋用樹脂より比較的軟質となっていることを特徴とする請求項 1 記載の蓋装置。

【請求項 4】

細長状ゴムに開口を設け、

固着部は細長状ゴムの開口内に挿入される突起と、この突起に装着された細長状ゴムを外方から覆う覆い部とを有することを特徴とする請求項 1 記載の蓋装置。

【請求項 5】

固着部は開閉蓋に、収納部は蓋本体に各々設けられ、固着部は蓋本体の揺動端から所定間隔をおいて配置されていることを特徴とする請求項 1 記載の蓋装置。

10

【発明の詳細な説明】**【0001】****【発明の属する技術分野】**

本発明は、容器本体の開口を密閉する蓋装置に係り、とりわけワンタッチで開口することができる蓋装置に関する。

【0002】**【従来の技術】**

内容物、例えばウェットティッシュを内部に収納する容器本体は、その開口が蓋装置により密閉される。

【0003】

20

このような蓋装置は、容器本体に装着されるとともに取出口を有する蓋本体と、この蓋本体に揺動自在に取付けられた開閉蓋とを備えている。

【0004】

使用に際しては、蓋本体に対して開閉蓋が開かれ、蓋本体に形成された取出口からウェットティッシュが一枚ずつ取出される。

【0005】**【発明が解決しようとする課題】**

上述のように、蓋装置は蓋本体と、この蓋本体に対して揺動自在に取付けられた開閉蓋とを備えており、使用に際しては開閉蓋をいちいち揺動させて開いている。

【0006】

30

このような場合、開閉蓋をワンタッチで開くことができれば都合が良い。しかしながら開閉蓋を例えば金属製スプリングで開くような構造を採用した場合、組立て工程が複雑となり、また金属製スプリングが内部に脱落したことを考えると非常に危険である。

【0007】

本発明はこのような点を考慮してなされたものであり、容易かつ安全に開閉蓋を開くことができる蓋装置を提供することを目的とする。

【0008】**【課題を解決するための手段】**

本発明は、容器本体に装着されるとともに、外枠と外枠の内側に形成された取出口を有する蓋本体と、この蓋本体に揺動自在に取付けられ、前記取出口を密閉する開閉蓋とを備え、前記蓋本体と前記開閉蓋との間の揺動部に、前記開閉蓋を開方向に向って付勢する弾性付勢手段を設け、開閉蓋の周縁に係止部が設けられ、蓋本体に前記係止部に係合する係合部が設けられ、前記蓋本体の係合部近傍であって外枠のうち係合部の外側に位置する部分に、上方から押圧された場合に下方へ弾性的に降下して開閉蓋の係止部と蓋本体の係合部との係合を解除する押圧部を設け、押圧部を上方から押圧することにより係止部と係合部との係合を解除して、弾性付勢手段により開閉蓋をワンタッチで開き、弾性付勢手段は細長状ゴムからなり、この細長状ゴムの一端を蓋本体に他端を開閉蓋に各々取付け、開閉蓋の閉時に細長状ゴムの揺動軸から離れる方向へ湾曲させ、蓋本体および開閉蓋のいずれか一方に、細長状ゴムの固着する固着部を設け、他方に細長状ゴムの差込み収納する収納部を設け、蓋本体および開閉蓋のうち収納部が設けられた一方に、開閉蓋の閉時に湾曲す

40

50

る細長状ゴムの中間部を受入れる受入部を設けたことを特徴とする蓋装置である。

【0009】

本発明は、係止部は開閉蓋の自由端に設けられていることを特徴とする蓋装置である。

【0010】

本発明は、蓋本体と開閉蓋は各々合成樹脂製となっており、このうち蓋本体用樹脂は開閉蓋用樹脂より比較的軟質となっていることを特徴とするの蓋装置である。

【0011】

本発明は、細長状ゴムに開口を設け、固着部は細長状ゴムの開口内に挿入される突起と、この突起に装着された細長状ゴムを外方から覆う覆い部とを有することを特徴とする蓋装置である。

10

【0012】

本発明は、固着部は開閉蓋に、収納部は蓋本体に各々設けられ、固着部は蓋本体の揺動端から所定間隔をおいて配置されていることを特徴とする蓋装置である。

【0013】

本発明によれば、弾性付勢手段により蓋本体に対して容易に開閉蓋を開放することができる。

【0014】

本発明によれば、板ゴムの復元力により蓋本体に対して容易に開閉蓋を開放することができる。

【0015】

本発明によれば、蓋本体の凹部内に板ゴムを収納することにより開閉蓋の閉時に、板ゴムの蓋本体側と開閉蓋側との間に空間を形成することができる。このため長期間にわたって板ゴムの復元力を維持することができる。

20

【0016】

本発明によれば、開閉蓋の内面のうち板ゴムが当接する部分にR形状を形成したので、開閉蓋の開閉に伴う板ゴムの折曲げおよび伸び作用をスムーズに行うことができる。

【0017】

本発明によれば、押圧部を押圧することにより開閉蓋の係止部と蓋本体の係合部との間の係合を解除することができる。

【0018】

本発明によれば、蓋本体用の合成樹脂は軟質となっているので、押圧部を押圧することにより、蓋本体を大きく撓せることができ、これにより開閉蓋の係止部と蓋本体の係合部との間の係合を容易に解除することができる。

30

【0019】

本発明によれば、細長状ゴムの一端を蓋本体に、他端を開閉蓋に取付け、閉時に細長状ゴムを揺動部から離れる方向に湾曲させたので、湾曲時の細長状ゴムの復元力をより大きくすることができる。

【0020】

本発明によれば、固着部に細長状ゴムの一端を固着し、他端を収納部に差込み収納することにより、細長状ゴムの取付けが容易となっている。

40

【0021】

本発明によれば、細長状ゴムの開口に固着部の突起を挿入し、突起に装着された細長状ゴムの覆い部により覆うことにより、細長状ゴムを固着部に確実に固着することができる。

【0022】

本発明によれば、収納部側に設けられた受入部内に湾曲する細長状ゴムを受入れることにより、開閉蓋の閉時に細長状ゴムをスムーズに受入部内に受入れることができ、細長状ゴムに傷がつくことはない。

【0023】

本発明によれば、細長状ゴムを固着する固着部は開閉蓋に、付帯本体と所定間隔をおい

50

て配置されているので、細長状ゴムの開閉蓋に対する作用点を開閉蓋の揺動端から離すことができ、開閉蓋の揺動端側における変形を防止することができる。

【 0 0 2 4 】

【 発明の実施の形態 】

第 1 の実施の形態

以下、図面を参照して本発明の実施の形態について説明する。図 1 乃至図 1 7 は本発明の第 1 の実施の形態を示す図である。

【 0 0 2 5 】

まず図 1 乃至図 3 により、本発明による蓋装置が組込まれたウェットティッシュ用容器について説明する。ウェットティッシュ容器 1 0 は、内部にウェットティッシュ 4 1 (図 4 参照) を収納する上方開口型の容器本体 1 1 と、容器本体 1 1 に嵌込まれる蓋装置 2 0 とを備えている。容器本体 1 1 の開口周縁には、フランジ部 1 2 が設けられ、このフランジ部 1 2 は、後述する蓋装置 2 0 側の周縁突部 3 4 内に嵌込まれるようになっている。

【 0 0 2 6 】

また蓋装置 2 0 は、容器本体 1 1 の開口を密閉する蓋本体 2 1 と、蓋本体 2 1 にヒンジ部 2 2 (図 3 (C) 参照) を介して一体成形された開閉蓋 2 3 とを有している。蓋本体 2 1 は、その略中央部の薄板 (上板) 2 7 と、薄板 2 7 の外側に段部 2 8 を介して設けられた外枠 3 3 とを有している。

【 0 0 2 7 】

また、薄板 2 7 には、ウェットティッシュ 4 1 を取出すための取出口 2 4 が細長円形状に設けられ、さらに取出口の周縁部 2 4 a 外方には、下部枠体 2 9 が設けられている。また上述のように外枠 3 3 の周縁には容器本体 1 1 側のフランジ部 1 2 の外側に嵌込まれる周縁突部 3 4 が設けられ、周縁突部 3 4 の内壁にはフランジ部 1 2 と係合する係合突起 3 4 a が突設されている。

【 0 0 2 8 】

さらに、開閉蓋 2 3 の内面には、下部枠体 2 9 に嵌込まれる上部枠体 3 5 が設けられている。そしてヒンジ部 2 2 を中心として開閉蓋 2 3 を回動し、下部枠体 2 9 に上部枠体 3 5 を嵌込むことによって、開閉蓋 2 3 が取出口 2 4 を密閉するようになっている。

【 0 0 2 9 】

また、開閉蓋 2 3 の自由端には係止片 3 2 が設けられている。さらに外枠 3 3 のうち開閉蓋 2 3 の自由端に隣接する部分はわずかに上方へ持上がって、押圧部 5 2 となっている。

【 0 0 3 0 】

図 3 (a) (b) に示すように、押圧部 5 2 は薄肉部 5 3 を有しており、また押圧部 5 2 の内壁には、開閉蓋 2 3 の係止片 3 2 に係合する係合突起 5 2 a が設けられている。このため押圧部 5 2 を上方から押圧した場合、薄肉部 5 3 を境として押圧部 5 2 が下方へ折曲がり、開閉蓋 2 3 の係止片 3 2 と係合突起 5 2 a との係合が解除されるようになっている。

【 0 0 3 1 】

また取出口 2 4 の周縁部 2 4 a は、図 5 に示すように、下方部 2 5 において曲線状の断面を有しており、ウェットティッシュ 4 1 はこの曲線状の下方部 2 5 を通過する際、引掛ることなくスムーズに通過することができる。この場合、曲線状断面は円弧状となっており、その半径は 1 mm 以上、好ましくは 2 ~ 1 0 mm となっている。なお、曲線状断面は、その半径が徐々に変化するものであってもよい。

【 0 0 3 2 】

また、図 1 および図 3 (c) に示すように、蓋本体 2 1 の薄板 2 7 には、板ゴム 5 0 の一側がかしめ部 5 1 により固着され、板ゴム 5 0 の他側は開閉蓋 2 3 の内面まで延びており、この板ゴム 5 0 により開閉蓋 2 3 を開方向へ付勢するようになっている。すなわち板ゴム 5 0 の一側に開口を設け、薄板 2 7 から突出する突起を板ゴム 5 0 の開口に挿入する。次にこの突起を上方から加熱することにより、板ゴム 5 0 が薄板 2 7 に固着され、同時

10

20

30

40

50

に突起の加熱によりかしめ部 5 1 が形成される。

【 0 0 3 3 】

図 1 に示されるように、板ゴム 5 0 は 2 つ設けられ、各板ゴム 5 0 の一側が蓋本体 2 1 の薄板 2 7 に固着され、他側は固定されることなく開閉蓋 2 3 の内面まで延びているが、板ゴム 5 0 を開閉蓋 2 3 の内面に固着し、板ゴム 5 0 の蓋本体 2 1 側を自由にしておいてもよい。また板ゴム 5 0 を蓋本体の薄板 2 7 および開閉蓋 2 3 の内面の両方に固着してもよい。さらに板ゴム 5 0 は 2 個に限らず、1 つ以上の任意の数だけ設けることができる。

【 0 0 3 4 】

板ゴム 5 0 は上述のように、開閉蓋 2 3 を開方向へ付勢するためのものであり、材料は特に限定されないが、硬度 4 0 ° ~ 7 0 ° (J I S K 6 3 0 1 - 1 9 7 5 加硫ゴム物理試験方法による) のものであって厚さ 1 . 5 ~ 3 mm のものが好ましい。板ゴム 5 0 の材料としては、シリコンゴム、クロロプレンゴム、ブタジエンゴム、ウレタンゴム、エチレン - プロピレン共重合体ゴム、天然ゴム等が考えられる。このような板ゴム 5 0 は圧縮成形、押出成形または射出成形により作製することができる。なお、板ゴム 5 0 の表面および裏面に、シボ加工を施してもよい。

10

【 0 0 3 5 】

また板ゴム 5 0 の形状としては、図 1 0 (a) に示すように、断面矩形状であってかつフラットのもの、図 1 0 (b) , (c) に示すように断面矩形状であってかつ予め一方側に折曲がっているもの、あるいは図 1 0 (d) に示すように断面山形状であってかつフラットなものが考えられる。さらに板ゴム 5 0 の断面形状としては、図 1 1 (a) に示すように断面矩形状のもの、図 1 1 (b) に示すように断面カマボコ形状のもの、図 1 1 (c) に示すように断面がなだらかな山形状のもの、あるいは図 1 1 (d) に示すように断面円筒状のものが考えられる。

20

【 0 0 3 6 】

なお、上述したウェットティッシュ用容器 1 0 を構成する容器本体 1 1 および蓋装置 2 0 は、いずれもポリプロピレン (P P) を用いたインジェクション成形により得られる。また容器本体 1 1 および蓋装置 2 0 については、この他に P E 、 P S 、 A B S 、エラストマー、P E T 、P V C 、ポリカーボネートを用いて成形してもよい。

【 0 0 3 7 】

次に図 4 により、容器本体 1 1 内に収納されるウェットティッシュ 4 1 について説明する。図 4 (a) に示すように、ウェットティッシュ 4 1 は柔軟なシートからなる密閉袋 4 0 内で折畳まれて積層配置され、この密閉袋 4 0 によって密閉される。各ウェットティッシュ 4 1 は折曲部 4 2 を形成して略二つ折りされ、各ウェットティッシュ 4 1 の折曲部 4 2 は交互に入れ替わっている。またウェットティッシュ 4 1 の二つ折りされた下半分 4 1 b は、下方に配置するウェットティッシュ 4 1 の上半分 4 1 a と更に下方に位置するウェットティッシュ 4 1 の上半分 4 1 a との間に挿入されている。このためウェットティッシュ 4 1 を一枚ずつ摘んで取出した場合、取出したウェットティッシュ 4 1 の下半分 4 1 b が、下方に位置するウェットティッシュ 4 1 の上半分 4 1 a を引張り上げるようになっている。なお、ウェットティッシュ 4 1 の折り方は、連続的に取り出すことができるように積層配置されていればよく、特に限定されるものではなく、例えば図 4 (b) のような折り方であってもよい。また密閉袋 4 0 の上端に開口 4 0 a が設けられ、この開口 4 0 a は密閉袋 4 0 上面に取外自在に貼付けられた蓋片 4 5 により密閉されている。

30

40

【 0 0 3 8 】

ウェットティッシュ 4 1 の素材としては、例えば、不織布、紙、ガーゼ等の繊維素材やシート状の発泡体、または紙ベースの軟質材料が用いられる。またウェットティッシュに含浸させる液体としては、殺菌剤、消毒剤、洗浄剤等を含んだ湿潤剤や化粧水や乳液等の化粧品が考えられる。

【 0 0 3 9 】

次にこのような構成からなる本実施例の作用について説明する。

まず、密閉袋 4 0 内にウェットティッシュ 4 1 を折畳んで積層配置し、開口 4 0 a を蓋

50

片４５により密閉する（図４）。次に、密閉袋４０内に密閉されたウェットティッシュ４１が、図１に示す容器本体１１内に収納され、その後蓋片４５が開口４０ａから取外される。

【００４０】

その後、容器本体１１のフランジ部１２の外側に、蓋装置２０側の周縁突部３４が嵌込まれ、フランジ部１２と係合突起３４ａとが係合して、容器本体１１の上方開口が蓋装置２０によって密閉される（図３）。

【００４１】

この場合、蓋装置２０の開閉蓋２３が蓋本体２１に対して閉となり、蓋本体２１の取出し口２４が開閉蓋２３により密閉されている。また開閉蓋２３の上部枠体３５が蓋本体２１の下部枠体２９に嵌込まれ、開閉蓋２３の係止片３２が蓋本体２１の係合突起５２ａに係合するとともに、板ゴム５０が薄板２７と開閉蓋２３との間で折曲げられている（図３（ａ））。

10

【００４２】

次に、押圧部５２が上方から押圧されると、押圧部５２は薄肉部５３を境として下方へ折曲がり、開閉蓋２３の係止片３２と蓋本体２１の係合突起５２ａとの係合および上部枠体３５と下部枠体２９との係合がいずれも解除される（図３（ｂ））。

【００４３】

上述のように、開閉蓋２３の閉位置において、板ゴム５０は薄板２７と開閉蓋２３との間で折曲げられ、開閉蓋２３を開方向へ付勢しているため、係止片３２と係合突起５２ａとの係合および上部枠体３５と下部枠体２９との係合が解除されると、板ゴム５０が真直ぐに伸びる復元力により、開閉蓋２３はヒンジ部２２を中心として回転し、開閉蓋２３が開となる（図３（ｃ））。

20

【００４４】

この場合、開閉蓋２３の内面のうち、板ゴム５０が当接する部分にはＲ形状が形成されており、このため開閉蓋２３の開閉に伴う板ゴム５０の折曲げおよび伸び作用をスムーズに行うことができる。

【００４５】

このように、押圧部５２を押圧するだけで、ワンタッチで開閉蓋２３を開とすることができる。

30

【００４６】

次に蓋本体２１の取出口２４からウェットティッシュ４１を指で摘んで上方へ引張る。その後、連続して、ウェットティッシュ４１を引張ることにより、第１番目のウェットティッシュ４１を容器本体１１内から取出すことができる。この場合、第２番目のウェットティッシュ４１の上半分４１ａが、第１番目のウェットティッシュ４１の下半分４１ｂによって引張られる。そして、第２番目のウェットティッシュ４１の上半分４１ａが、取出口２４の周縁部２４ａに引掛かった時点で、第２番目のウェットティッシュ４１が停止する。

【００４７】

ウェットティッシュ４１を取出口２４から引張る際、周縁部２４ａの下方部２５は曲線状断面または隅取り断面を有しているため、ウェットティッシュ４１を周縁部２４ａの下方部２５においてスムーズに通過させることができる。このため、ウェットティッシュ４１を引張っても容器１０全体が持ち上がることはなく、また軟質のウェットティッシュ４１でも破損することはない。

40

【００４８】

次に取出口２４を開閉蓋２３で密閉する場合は、ヒンジ部２２を中心として開閉蓋２３を取出口２４側へ回転する。そして開閉蓋２３の上部枠体３５を蓋本体２１の下部枠体２９に嵌め込むとともに、係止片３２と係合突起５２ａに係合させて取出口２４を開閉蓋２３で密閉する。

【００４９】

50

(他の実施例)

次に図6により本発明の他の実施例について説明する。図6に示す実施例は、蓋本体21と開閉蓋23とが分割されている点異なるのみであり、他は図1乃至図5に示す実施例と同一である。すなわち、図6に示すように蓋本体21に、揺動軸37を介して開閉蓋23が揺動自在に取付けられている。このように蓋本体と開閉蓋23とを分割して成形することにより、成形作業の容易性を図ることができる。

【0050】

次に図7乃至図9により、本発明の更なる他の実施例について説明する。図7乃至図9に示す実施例において、図1乃至図6に示す実施例と同一部分には同一符号を付して詳細な説明は省略する。

10

【0051】

図7乃至図9に示すように、蓋本体21の薄板27には凹部27aが形成され、板ゴム50はこの凹部27a内に収納配置されている。板ゴム50は蓋本体21の凹部27a内に、かしめ部51により固着されている。また開閉蓋23の内面のうち、板ゴム50が当接する部分にはR形状が形成されている。

【0052】

このように板ゴム50を薄板27の凹部27a内に収納配置することにより、開閉蓋23を閉とした場合に、板ゴム50のうち蓋本体21側部分と開閉蓋23側部分との間に空間を形成することができる。このため板ゴム50の蓋本体21側部分と開閉蓋23側部分を完全に重ね合せる場合に比べて、板ゴム50の復元力を長期間維持することができる。また開閉蓋23の内面のうち板ゴム50が当接する部分をR形状としたことにより、開閉蓋23の開閉時において板ゴムの折曲げおよび延び作用をスムーズに行うことができる。

20

【0053】

なお、前述の各実施例と同様に、板ゴム50を開閉蓋23の内面に固着し、板ゴム50の蓋本体21側を自由にしておいてもよい。また、板ゴム50を蓋本体の薄板27および開閉蓋23の内面の両方に固着してもよい。さらに板ゴム50は2個に限らず、1つ以上の任意の数だけ設けることができる。

【0054】

次に図17(a)(b)により、板ゴム50の他の固定構造について説明する。図1乃至図9に示す各実施例において板ゴム50を薄板27にかしめ部51により固着した例を示したが、板ゴム50の固定構造はこれに限られるものではない。すなわち図17(a)(b)に示すように薄板27に挿入ケース65を設け、この挿入ケース65内に板ゴム50を挿入して固定してもよい。また開閉蓋23を成形する際、板ゴム50を予め金型内にインサートしておいて成形してもよい。

30

【0055】

次に図12および図13により、蓋本体21の押圧部52の変形例について説明する。まず図12(a)(b)(c)により押圧部52の第1の変形例を示す。図12(a)(b)(c)において、蓋本体21に押圧部52が、蓋本体21と別体に設けられており、開閉蓋23は蓋本体21の段部28を越えて押圧部52側まで延びている。

【0056】

なお、図12(a)(b)(c)のうち、図12(b)は図12(a)のB-B線断面図であり、図12(c)は押圧部52の斜視図である。図12(a)(b)(c)に示すように押圧部52は、開閉蓋23の係止片32と係合する係合突起55と、蓋本体21から外方へ突出する支持突起21aに係合する脚56とを有している。

40

【0057】

図12(a)(b)(c)において、押圧部52は、脚56を蓋本体21の支持突部21aに係合させることにより蓋本体21に支持される。開閉蓋23の開位置において、開閉蓋23の係止片32が押圧部52の係合突起55に係合する。

【0058】

次に押圧部52が押圧されると、押圧部52が内側へ折曲がって、開閉蓋23の係止片

50

３２と係合突起５５との係合が解除される。

【００５９】

次に図１３（ａ）（ｂ）（ｃ）により、押圧部５２の第２の変形例を示す。図１３（ａ）（ｂ）（ｃ）において、蓋本体２１に押圧部５２が蓋本体２１と別体に設けられている。なお、図１３（ａ）（ｂ）（ｃ）のうち、図１３（ｂ）は図１３（ａ）のＢ－Ｂ線断面図であり、図１３（ｃ）は押圧部５２の斜視図である。

【００６０】

図１３（ａ）（ｂ）（ｃ）に示すように、押圧部５２は蓋本体２１側に設けられた軸６１が嵌まれる軸受５９を有しており、押圧部５２は軸６１を中心として揺動可能となっている。また押圧部５２は蓋本体２１の上面に当接する脚５８と、開閉蓋２３の係止片３２に係合する係合突起５７とを有している。さらに押圧部５２には、蓋本体２１の上面と当接する板ばね６２が設けられている。

10

【００６１】

図１３（ａ）（ｂ）（ｃ）において、開閉蓋２３が閉じられると、開閉蓋２３の係止片３２が押圧部５２の係合突起５７に係合する。この場合、押圧部５２は板ばね６２により、図１３（ｂ）において反時計方向に付勢され、脚５８と蓋本体２１とはわずかに離れている。

【００６２】

次に押圧部５２が図１３（ｂ）において時計方向に押圧されると、押圧部５２が時計方向に回転し、脚５８と蓋本体２１とが当接する。押圧部５２の時計方向の回転に伴って、開閉蓋２３の係止片３２と係合突起５７との係合が解除される。

20

【００６３】

次に図１４乃至図１６により取出口２４の変形例について説明する。まず取出口２４の周縁部２４ａを、例えば図１４（ａ）～（ｆ）に示すような断面形状としてもよい。図１４（ａ）～（ｆ）に示すように、周縁部２４ａの下方部２５は、すべて曲線状の断面を有している。

【００６４】

また図１５に示すように、周縁部２４ａがその下方部２５において隅取りされた断面を有するよう形成してもよい。図１５において、ウェットティッシュ４１は、この隅取りされた下方部２５を通過する際、スムーズに通過することができる。

30

【００６５】

また、取出口２４の平面形状としては、図１に示す細長円形状のものに限ることはない。例えば、図１６（ａ）～（ｈ）に示すように薄板２７から取出口２４に向って複数の突片２６を突出させてもよい。この場合、突片２６の縁部２６ａは、取出口２４の周縁部２４ａの一部を構成する。従って、この突片２６の縁部２６ａは、図４および図５に示す曲線状断面、図１４（ａ）～（ｆ）に示す曲線状断面または図１５に示す隅取りされた断面を有している。

【００６６】

なお取出口２４の周縁部２４ａ全周にわたって、下方部２５に曲線状断面が形成されている必要はなく、ウェットティッシュ４１が当たると思われる周縁部２４ａのみにおいて下方部２５に曲線状断面を形成してもよい。

40

第２の実施の形態

次に本発明の第２の実施の形態について説明する。図１８乃至図２４は本発明による第２の実施の形態を示す図である。なお図１乃至図１７に示す第１の実施の形態と同一部分には同一符号を付して詳細な説明は省略する。

【００６７】

図１８乃至図２０に示すように、ウェットティッシュ容器１０は、内部にウェットティッシュ４１（図４参照）を収納する上方開口型の容器本体１１と、容器本体１１に嵌込まれる蓋装置２０とを備えている。容器本体１１の開口周縁部にはフランジ部１２が設けられ、このフランジ部１２は後述する蓋装置２０の周縁突部３４内に嵌込まれる。

50

【0068】

また蓋装置20は、容器本体11の開口を密閉する蓋本体21と、蓋本体21に揺動軸77を介して揺動自在に取付けられた開閉蓋23とを有している。揺動軸77は開閉蓋23に一体的に形成され、揺動軸77の突起77aが蓋本体21の図示しない受部に挿入されて、蓋本体21に開閉蓋23が揺動自在に取付けられるようになっている(図19)。

【0069】

また蓋本体21はその略中央部の第1上板(第1薄板)27aと、第1上板27aの外側に設けられ、第1上板27aより高い位置にある第2上板(第2薄板)27bと、第2上板27bの外側に段部28を介して設けられた外枠33とを有している。また第1上板27aには、ウェットティッシュ41を取出すための取出口24がだ円形状に設けられ、取出口24の周縁に周縁部24aが設けられるとともに、この周縁部24aは、下方部において曲線状の断面を有している(図5参照)。このためウェットティッシュ41が取出口24の周縁部24aを通過する際、周縁部24aに引掛ることなくスムーズに通過することができる。また上述のように外枠33の周縁には、容器本体11のフランジ部に外側に嵌込まれる周縁突部34が設けられている。

10

【0070】

開閉蓋23の内面には、第1上板27aと第2上板27bとを隔てる段部86に嵌込まれる枠体85が設けられている。そして、揺動軸77を中心として開閉蓋23を回転し、段部86に枠体85を嵌込むことによって、開閉蓋23が取出口24を密閉するようになっている。

20

【0071】

さらに図18に示すように、開閉蓋23の自由端には係止片32が設けられ、他方蓋本体21の段部28のうち係止片32に対応する位置に係止片32と係合する係合突起79が設けられている(図23参照)。開閉蓋23が閉となった場合、係止片32の先端32aは係合突起79と係合する。他方、係合突起79上の外枠33には外枠33表面から凹んだ押圧部80が設けられ、この押圧部80を上方から押圧することにより、蓋本体21の外枠33が撓み変形し、係合突起79が下方へ降下して係止片32の先端32aと係合突起79との係合が外れるようになっている。

【0072】

ところで、蓋本体21は軟質のポリプロピレンからなり、その曲げ弾性率はJISK6758による測定値が5,000~11,000kg/cm²、好ましくは5,200kg/cm²となっている。このようなポリプロピレンとしては、例えば昭和電工(株)製のMD770Hが挙げられる。

30

【0073】

一方、開閉蓋23は硬質のポリプロピレンからなり、その曲げ弾性率はJISK6758による測定値が12,000~18,000kg/cm²、好ましくは15,300kg/cm²となっている。また開閉蓋23のポリプロピレンは流動性が良好で、そのMFR(Melt Flow Rate)はJISK6758による測定値が56g/10minとなっている。このようなポリプロピレンとしては、例えば出光石油化学(株)製のJ-6071HPが挙げられる。

40

【0074】

また図23に示すように、蓋本体21の押圧部80と段部28との間にはR1.2mm程度のR部80aが形成され、さらに係合突起79の高さhは約1.0mmと小さくなっている。

【0075】

このように蓋本体21は開閉蓋23に比較してかなり軟質となっており、また押圧部80と段部28との間にR部80aが形成されているので、蓋本体21の押圧部80を押圧することにより、蓋本体21が撓むことになる(図23)。この場合、係合突起79の高さhは約1.0mmと小さくなっているため、蓋本体21の係合突起79が大きく下方へ降下して、係止片32の先端32aと係合突起79との係合を容易に解除することができ

50

る。

【0076】

また図18に示すように蓋本体21と開閉蓋23との間の揺動軸77上に、開閉蓋23を開方向に向って付勢する細長状の板ゴム50が設けられている。すなわち、蓋本体21には、板ゴム50の一端を差込み収納する収納部75が設けられ、また開閉蓋23には蓋本体21から所定間隔をおいて配置され、板ゴム50の他端を固着する固着部76が設けられている。このうち収納部75は板ゴム50の一端を差込み収納するものである。

【0077】

他方、固着部76は板ゴム50の他端に設けられた開口50aに挿入される突起81と、この突起81に装着された板ゴム50を外方から覆う覆い部76aとからなり、板ゴム50の他端を突起81および覆い部76aによって堅固に固定している(図19、図21および図22参照)。

10

【0078】

次に図21および図22により、固着部76について更に詳述する。

【0079】

図21および図22に示すように、板ゴム50の開口50aに固着部76の突起81が挿入され、板ゴム50の外方に覆い部76aが設けられている。この場合、板ゴム50は開閉蓋23に設けられた一对のリブ82内に配置され、一对のリブ82の上端および突起81の上端と、覆い部76aの下面とが超音波シール等により溶着され、覆い部76aがリブ82と突起81に固定されている。また突起81には中央穴81aが形成され、この中央穴81a内に覆い部76aに一体的に形成されたピン76bが挿着されている。このような固着部76の構成によって、板ゴム50の他端は固着部76により堅固に固定される。

20

【0080】

なお、板ゴム50の他端を固着部76により固定する代わりに、開閉蓋23の成形時に予め板ゴム50を金型内にインサートしておき、開閉蓋23を成形する際、板ゴム50を同時に開閉蓋23に固着してもよい。

【0081】

また図18および図20に示すように、蓋本体21の収納部75近傍に、開閉蓋23の閉時に板ゴム50が湾曲した場合、この板ゴムを受入れる受入部78が設けられている。

30

【0082】

蓋本体21に対して開閉蓋23が閉となった場合、板ゴム50は揺動軸77から離れる方向に湾曲し、開閉蓋23を開方向に向って付勢するようになっている。この場合、湾曲した板ゴム50は、受入部78内にスムーズに受入れられる(図24参照)。このため、開閉蓋23の閉時に板ゴム50が蓋本体21と開閉蓋23との間に挟まれて板ゴム50に傷をつけることはない。

【0083】

図18において板ゴム50は1個設けられているが、2個以上任意の数だけ設けてもよい。また板ゴムの材料および形状は、図1乃至図17に示す第1の実施の形態と同様のものを用いることができる。

40

【0084】

次にこのような構成からなる本実施の形態の作用について説明する。

【0085】

まず、板ゴム50の一端が蓋本体21の収納部75内に差込み収納されるが、板ゴム50の他端は予め開閉蓋23に固着部76により固着されている。

【0086】

次に容器本体11のフランジ部12の外側に、蓋装置20の周縁突部34が嵌込まれ、容器本体11の上方開口が蓋装置20によって密閉される。次に蓋装置20の開閉蓋23が蓋本体21に対して閉となり、係合突起79に対して係合片32の先端32aが係合して蓋本体21の取出口24が開閉蓋23により密閉される。このとき板ゴム50は揺動軸

50

77から離れる方向に湾曲し、開閉蓋23を開方向に向って付勢する。

【0087】

この場合、図18および図24に示すように、板ゴム50は蓋本体21から所定間隔において配置された固着部76により固着されているので、板ゴム50は開閉蓋23のうち揺動端から少し内側に入った固着部76を作用点として開閉蓋23を上方へ持ち上げる。一般にウェットティッシュ容器10は夏場の室内等比較的高温室内で用いられるため、蓋本体21および開閉蓋23は軟化しやすくなっている。本願発明によれば、板ゴム50が開閉蓋23のうち揺動端から少し内側に入った作用点を上方に持ち上げるので、揺動端を作用点とする場合に比べて開閉蓋23の揺動端の変形を未然に防止することができる。

【0088】

10

次に枠体33の押圧部80を上方から押圧することにより、係合突起79が下方へ降下して、係止片32の先端32aと係合突起79との間の係合が外れる。この場合、板ゴム50の復元力により、開閉蓋23は揺動軸77を中心として回転し、開閉蓋23が開となる。

【0089】

本実施の形態によれば、板ゴム50の両端を蓋本体21および開閉蓋23に取付けるとともに、開閉蓋23の閉時に板ゴム50を揺動軸77から離れる方向に湾曲させたことにより、湾曲時の板ゴム50の復元力をより大きくすることができる。

【0090】

【発明の効果】

20

以上のように本発明によれば、弾性付勢手段により開閉蓋を容易に開放することができるので、内容物の取出しをスムーズに行うことができる。

【0091】

本発明によれば、板ゴムの復元力により確実に開閉蓋を開放することができる。また金属製スプリングを設けた場合に比べて脱落の際の危険性を回避することができる。

【0092】

本発明によれば、開閉蓋の閉時に板ゴムの蓋本体側と開閉蓋側との間に空間を形成することができるので、長期にわたって板ゴムの復元力を維持することができ、開閉蓋の開放を確実に行うことができる。

【0093】

30

本発明によれば、開閉蓋の開閉に伴う板ゴムの折曲げおよび伸び作用をスムーズに行うことができるので、開閉蓋の開閉作業を確実に行うことができる。

【0094】

本発明によれば、押圧部を押圧して開閉蓋の係止部と蓋本体の係合部との間の係合を解除することができるので、ワンタッチで開閉蓋を開放することができる。

【0095】

本発明によれば、押圧部を押圧することにより蓋本体を大きく撓ませることができ、開閉蓋の係止部を蓋本体の係合部との間の係合をより簡単に解除することができる。

【0096】

本発明によれば、開閉蓋の閉時において細長状ゴムの復元力を大きくとることができるので、開閉蓋の開作業を容易に行うことができる。

40

【0097】

本発明によれば、細長状ゴムの取付けを容易に行うことができるので組立作業の効率化を図ることができる。

【0098】

本発明によれば、細長状ゴムを固着部により確実に固着することができる。

【0099】

本発明によれば、開閉蓋の閉時に細長状ゴムをスムーズに受入部内に受入れることができ、これにより細長状ゴムに傷をつけることはない。

【0100】

50

本発明によれば、細長状ゴムの開閉蓋に対する作用点を開閉蓋の揺動端から離して、開閉蓋の揺動端における変形を防止することができる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】 本発明の第 1 の実施の形態を示す、開時におけるウェットティッシュ用容器の全体斜視図。

【図 2】 閉時におけるウェットティッシュ用容器の全体斜視図。

【図 3】 開閉蓋の開作用を示す側断面図。

【図 4】 ウェットティッシュを収納した密閉袋を示す側断面図。

【図 5】 蓋本体に設けられた取出口の断面図。

【図 6】 蓋装置の他の実施例を示す斜視図。

10

【図 7】 蓋装置の更に他の実施例を示す部分斜視図。

【図 8】 図 7 に示す蓋装置の側断面図。

【図 9】 図 7 に示す蓋装置の平面図。

【図 10】 板ゴムの変形例を示す図

【図 11】 板ゴムの変形例を示す図。

【図 12】 蓋本体の押圧部の変形例を示す図。

【図 13】 蓋本体の押圧部の変形例を示す図。

【図 14】 取出口の変形例を示す断面図。

【図 15】 取出口の変形例を示す断面図。

【図 16】 取出口の変形例を示す平面図。

20

【図 17】 板ゴムの他の固定構造を示す図。

【図 18】 本発明の第 2 の実施の形態を示す、開時におけるウェットティッシュ用容器の全体斜視図。

【図 19】 開閉蓋を示す裏面図であって、板ゴムを取付ける前の状態を示す図。

【図 20】 蓋本体を示す平面図。

【図 21】 開閉蓋の固着部を示す拡大図。

【図 22】 開閉蓋の固着部を示す断面図。

【図 23】 係止片を係合突起との係合状態を示す側断面図。

【図 24】 開閉蓋の閉時における板ゴムの湾曲状態を示す図。

【符号の説明】

30

10 ウェットティッシュ用容器

11 容器本体

20 蓋装置

21 蓋本体

23 開閉蓋

24 取出口

24a 周縁部

25 下方部

32 係止片

40 密閉袋

40

40a 開口

41 ウェットティッシュ

50 板ゴム

51 かしめ部

52 押圧部

52a 係合突起

75 収納部

76 取付部

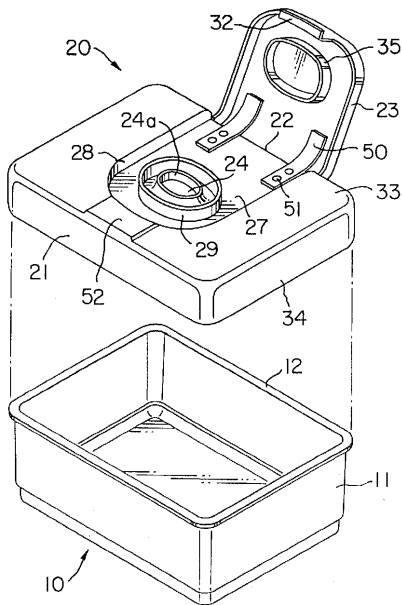
76a 覆い部

77 揺動軸

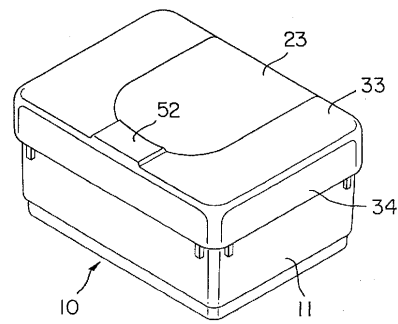
50

- 7 9 係合突起
- 8 0 押圧部
- 8 1 突起

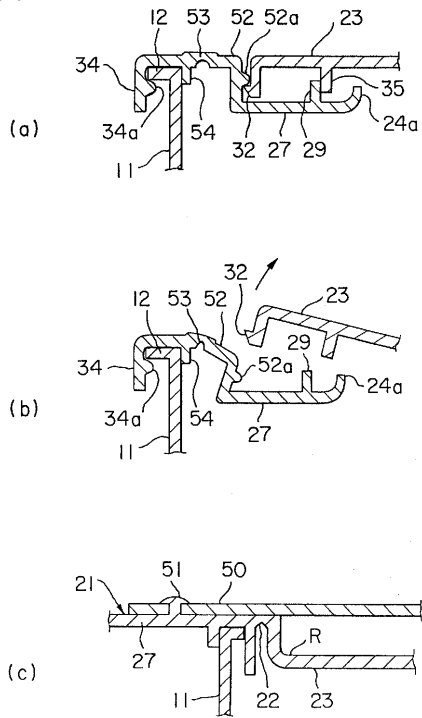
【図 1】



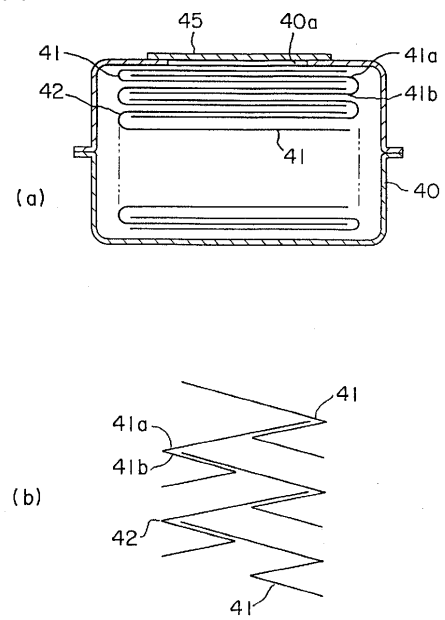
【図 2】



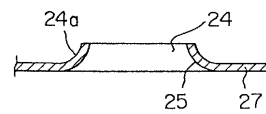
【図 3】



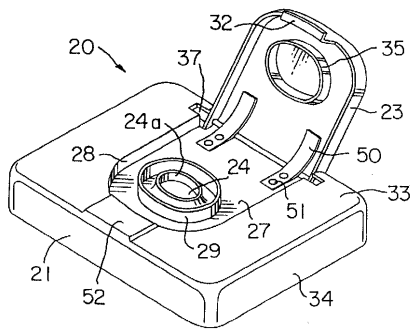
【図 4】



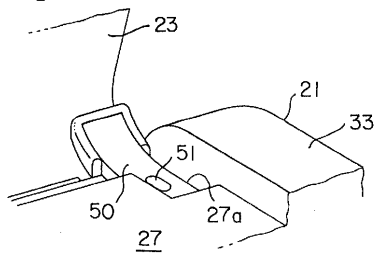
【図 5】



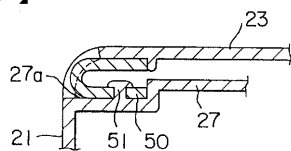
【図 6】



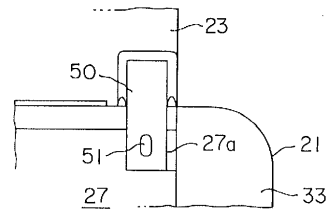
【図 7】



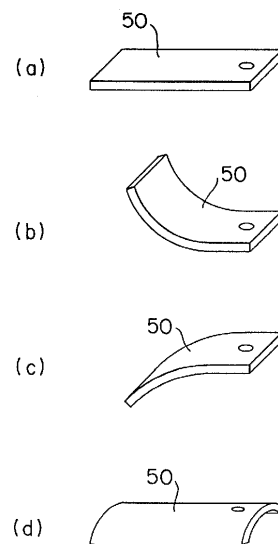
【図 8】



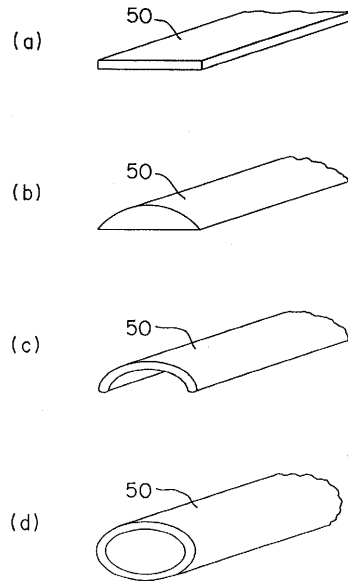
【図 9】



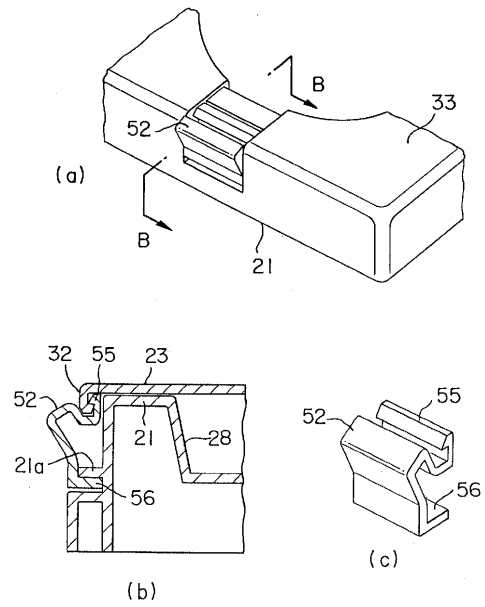
【図 10】



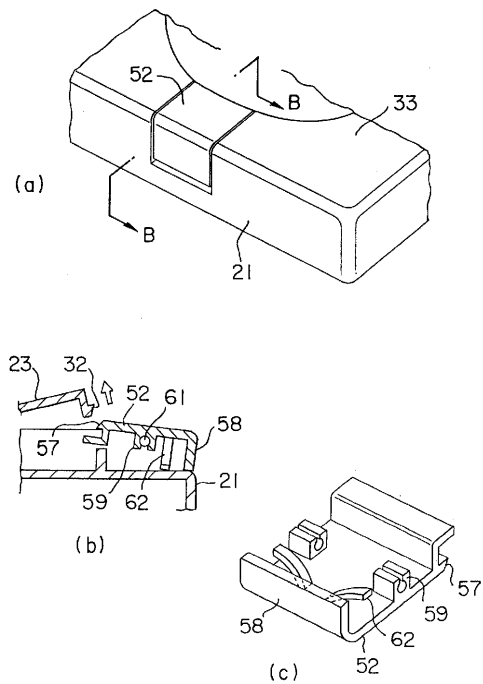
【図 1 1】



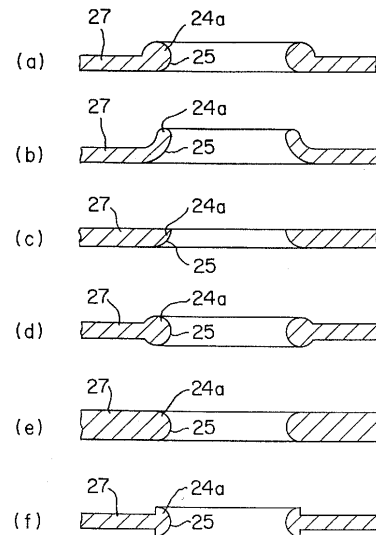
【図 1 2】



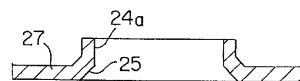
【図 1 3】



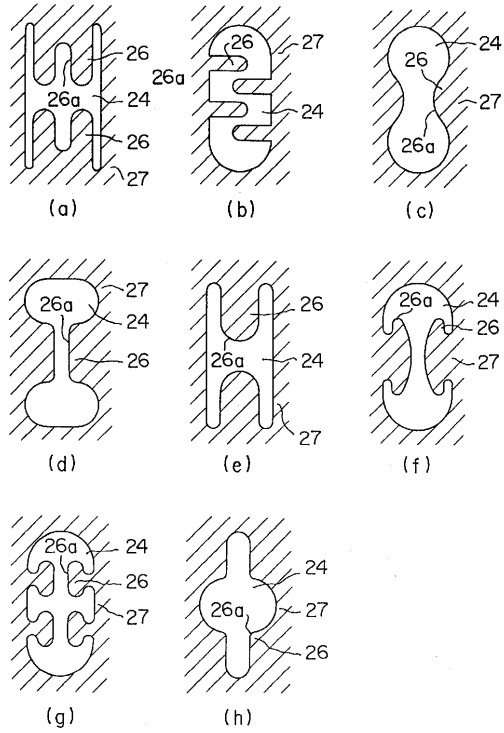
【図 1 4】



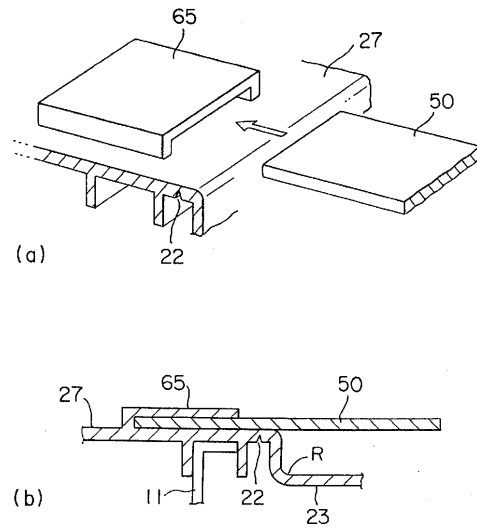
【図 1 5】



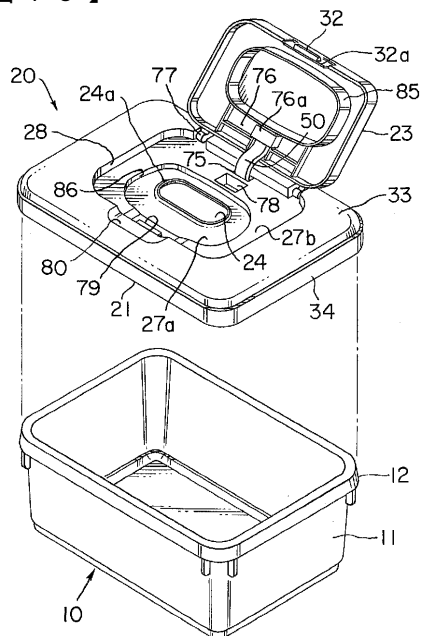
【図 16】



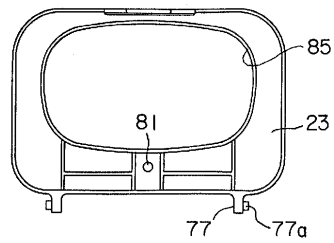
【図 17】



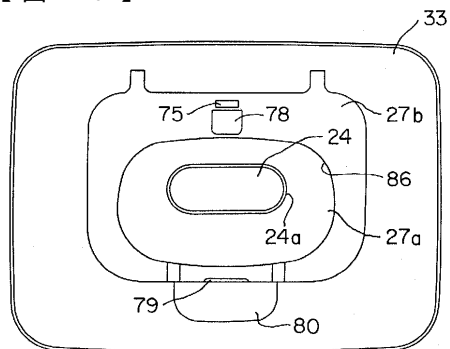
【図 18】



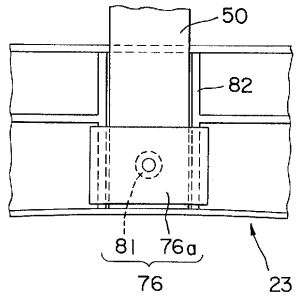
【図 19】



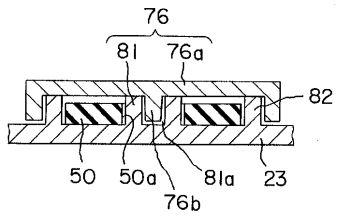
【図 20】



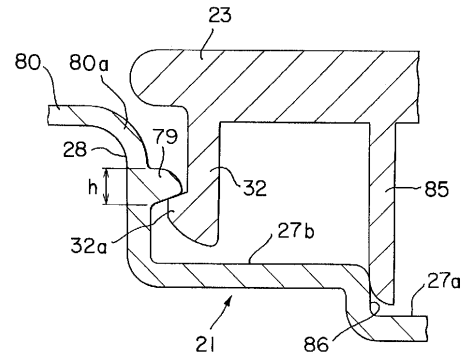
【図 2 1】



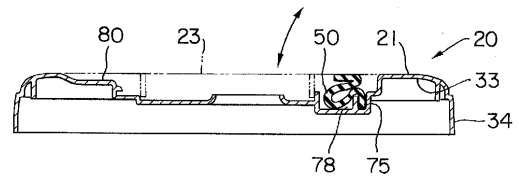
【図 2 2】



【図 2 3】



【図 2 4】



フロントページの続き

- (72)発明者 坂 東 健 司
愛媛県川之江市川之江町2 5 2 9 - 2 2 9
- (72)発明者 林 正 保
東京都新宿区市谷加賀町一丁目1 番1 号 大日本印刷株式会社内
- (72)発明者 篠 木 則 和
東京都新宿区市谷加賀町一丁目1 番1 号 大日本印刷株式会社内

審査官 山崎 勝司

- (56)参考文献 特開平0 7 - 0 6 1 4 5 6 (J P , A)
特開平0 8 - 2 1 7 1 1 3 (J P , A)
実公昭6 4 - 0 0 0 8 1 0 (J P , Y 2)
実開平0 2 - 0 0 1 3 7 6 (J P , U)
登録実用新案第3 0 0 7 6 8 5 (J P , U)
実公昭3 0 - 0 0 9 6 2 6 (J P , Y 1)
実開昭5 0 - 0 5 3 3 2 5 (J P , U)
実開昭6 3 - 0 4 2 9 0 8 (J P , U)
実開平0 7 - 0 2 8 0 4 9 (J P , U)

(58)調査した分野(Int.Cl.⁷, D B名)

B65D 43/00
B65D 83/08
F16B 21/00